

琉球大学学術リポジトリ

小学校教育における非認知能力の実態把握及びその教育の可能性に関する研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 我那覇, ゆり子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017982

小学校教育における非認知能力の実態把握及びその教育の可能性に関する研究

A Study on Factual Investigation of Noncognitive Skills and Possibilities
for Education in Elementary Education

我那覇 ゆり子

Yuriko GANAHA

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・那覇市立松川小学校

1. テーマ設定理由

グローバル化の進展や科学技術の進歩の加速によって、社会、経済、環境など様々な分野で大きな変化に直面している。こうした予測困難な時代を目的に向かって進んでいくためには、子供達に好奇心や想像性、粘り強さ、自己調整といった力をつけるとともに、他者の考えや価値観を尊重する態度、いわゆる「非認知能力」の育成が求められる。このような「非認知能力」と称されるものは、社会的・経済的成功に大きく影響することがわかっている(Heckman 2013=2015)。経済協力開発機構(2018;以下OECD)は、そのような能力を社会情動的スキルと称し、目標の達成(忍耐力、自己抑制、目標への情熱)、他者との協働(社交性、敬意、思いやり)、感情のコントロール(自尊心、楽観性、自信)に関するスキルとした。これらのスキルを向上させることが、健康や社会参加、生活満足度や認知能力の向上に強く影響を及ぼすことを明らかにし、早期段階の育成が重要であることを示している(OECD 2018)。無藤(2018)は、社会情動的スキルを「学びに向かう力」そのものであると述べている。中央教育審議会(2016)は、育成を目指す資質・能力として、自己の感情や行動を統制する力、協働する力などの情意や態度等を「学びに向かう力・人間性等」と示し、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」をどう働かせていくかを決定付ける重要な要素だとしている。

一方、非認知能力とは何なのか、どのように測定方法で把握され、どのような効果があり、どのような教育的介入が可能なのかという点については明確ではない(小塩 2021)。また、旧来、社会的経済的成果を予測する要因としてIQ等の認知能力が注目されてきたことや数値化される認知能力に比べ、非認知的な性質に関しては、実態把握の難しさが要因となり、効果的な教育法の開発・評価やそれに基づいた教育実践は少ない(国立教育政策研究所, 2017)。筆者の教職経験からも、学校では学力向上対策が最重要課題とされ、非認知能力の向上にむけた取組は認知能力の向上の取組と同等ではないと感じている。また、沖縄県の子供達は、挑戦心や達成感、自己有用感について、肯定的回答が全国平均に比べ低く(国立教育政策研究所 2020)、主体的な学習態度や目標に向け継続して努力する態度についても課題がある(沖縄県教育委員会 2020)。したがって、沖縄県の子供達の非認知能力に何かしらの課題があると考えられる。

これらのことから、非認知能力の向上に向けて、非認知能力の概念の理解や実態把握、小学校における教育の可能性を明らかにしていく必要があると考え、本テーマを設定した。

2. 研究の目的

本研究は、小学校高学年児童の非認知能力の実態把握及び教育実践を通して、非認知能力の教育の可能性への効果を検討することを目的とした。

3. 研究方法

(1) 非認知能力の実態調査

5県の第6学年児童を対象に非認知能力に関する質問紙調査を実施した。質問紙はベネッセ教育総合研究

我那覇：小学校教育における非認知能力の実態把握及びその教育の可能性に関する研究

所(2019)の結果等を参考にした。調査は以下のように2種行った。

調査Ⅰ：156名(沖縄県3校)対象に非認知能力に関する記名質問紙調査を行い、あわせて令和2年度全国学力・学習状況調査の国語・算数の結果を調査した。

調査Ⅱ：1013名対象(沖縄県8校、他4県11校)に非認知能力に関する無記名質問紙調査した。

調査は2020年10月～12月にかけて実施した。調査Ⅰは、非認知能力と学力の関連を検討するため、記名質問紙を用いた。調査Ⅱは、非認知能力の実態、地域差を明らかにするため、無記名質問紙を用いて実施した。両者の質問紙の内容は同じである。

【調査手続き】筆者が教育委員会または各学校長に面会や電話等で、研究の目的、方法、調査結果の取り扱いについて説明し、調査を依頼し、許可を得た。学校長が調査対象学級の担任に調査概要を説明し、学級担任から児童へ調査について説明後、質問紙を配布・回収した。

【対象者】調査対象は第6学年;沖縄県小学校8校638名、他県小学校第6学年531名(A県7校217名、B県1校114名、C県1校111名;D県2校88名)

【分析方法】調査結果について最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。次に、非認知能力と国語、算数の得点との相関を検討するためスピアマンの相関分析を行った。地域、学校、学級間による非認知能力の差を明らかにするため、各因子の総合得点の平均値を算出した後、一元配置の分散分析及び多重比較にて分析した。統計解析にあたっては、IBM SPSS Statistics 26 for windowsを使用し、統計的有意水準はいずれも5%(両側検定)とした。

(2) 非認知能力の向上にむけた実践

実践研究では、非認知能力の向上に効果的かつ小学校教育において実践可能な取り組みを検討し、授業実践を行った。また、どのような指導及び支援が有効であるかを検証するために、児童の発言や観察をビデオやICレコーダー等の記録や、記述等をワークシート等から見取り考察した。

4. 非認知能力に関する先行研究の整理

(1) 本研究で目指す非認知能力を構成する要素について

表1は非認知能力(Heckman 2013=2015;小塩 2021)と社会情動的スキル(OECD 2018)、学びに向かう力、人間性等(中央教育審議会 2016)を構成する要素を整理したものである。これらを筆者が3つの視点で分類し「目標の達成」「他者との協働」「感情の調整」と名付けた。これを参考に、本研究で目指す非認知能力の具体的な姿を表1の(4)のように設定し、その育成に向け取り組んだ。

表1 各先行研究における非認知能力等の要素と本研究で目指す児童の姿

各研究 視点	(1)非認知能力 (ヘックマン, 2015)	(2)非認知能力 (小塩真司, 2021)	(2)社会情動的スキル (OECD, 2018)	(3)学びに向かう力, 人間性等 (中央教育審議会, 2016)	(4)本研究で目指す児童の姿 (非認知能力)
目標の達成	・長期的計画を実行する能力 ・根気強さや意欲といった社会的情動的性質	・誠実性 ・グリット ・自己制御, 自己コントロール ・好奇心 ・批判的思考 ・時間的展望	目標の達成 ・忍耐力 ・自己抑制 ・目標への情熱	・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力 ・持続可能な社会づくりに向けた態度	①粘り強く取り組む。 ②困難があってもあきらめない。 ③目標の達成に向けて自分を律する。
他者との協働	・他人との協働に必要な社会的感情的制御	・共感性	他者との協働 ・社交性 ・敬意 ・思いやり	・よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度 ・多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、リーダーシップやチームワーク ・優しさや思いやり等の人間性	④他者の考えや気持ちに共感できる。 ⑤目的を共有し他者と協力する。 ⑥自己のよさを生かし役立てる。
感情の調整	・注意深さや自信といった社会的情動的性質	・楽観性 ・情動知能 ・感情調整・自尊感情 ・セルフコンパッション ・マインドフルネス ・レジリエンス ・エゴレジリエンス	感情のコントロール ・自尊心 ・楽観性 ・自信	・自己の感情や行動を統制する力	⑦前向きに考え行動しようとする ⑧自分を認め励ます。 ⑨感情に向き合いその要因を理解する。

(2) 小学校教育における非認知能力の教育の可能性について

① 教育観の改善

遠藤 (2021) は、非認知能力は、日常全般において、子どもが様々な感情を経験しているそのタイミングでその都度、教師などの身近な大人から、その感情に真摯に向き合ってもらい、適切な調整をなされる中で、おのずと実り多い形で培われると述べている。このことから、非認知能力の教育の機会は、授業場面だけでなく、学校教育の様々な機会や生活指導などの一人一人と関わる機会を生かすことが重要である。そのような偶発的な機会を生かし指導や支援を行うことができるようするためには、教師の教育観の改善が必要だと考える。また、Duckworth (2016=2016) は、「やり抜く力」の育成について、子供の困っていることにすぐ気づき、子供の考えを聞きながら教師の学級では、子供達の満足度が高く、勉強に積極的に取り組み、大学への進学希望率も高いことや、教師が期待を込めたフィードバックをすることにより子供の意欲が向上したことから、日々のふれあいの中で交わされる言葉や行動を通して、教師が児童に「期待や自信」と「支援」を与えることの重要性を示している。このことから、非認知能力の向上のためには、児童に寄り添う姿勢や期待や自信を持たせるような支援が有効である。

これらのことを踏まえ、非認知能力の向上に資する以下のような教育観が必要であると考える。

表2 非認知能力の向上に資する教育観

① 教師は、非認知能力が、社会的・経済的によりよい人生を生きる上で重要な力であると捉え、その向上を重視する。
② 教師は、児童の非認知的な側面の能力を性格と捉えたり、不変的なものと捉えたりせず、向上可能なスキルと捉え、向上に向け取り組む。
③ 教師は、児童自身が非認知能力の意義や重要性を理解し、その向上にむけ努力することができるような指導や支援を行う。
④ 教師は、学校教育が認知能力の向上に偏重していないか懐疑的な視点をもち、教育活動が非認知能力と認知的スキルの両方の向上に資するようにする。

② 学習指導並びに生活指導の改善

中央教育審議会(2016)は、「学びに向かう力・人間性等」について、その情意や態度等を育てていくためには、体験活動も含め、社会や世界との関わりの中で、「学んだことの意義」を実感できるような学習活動の充実が重要であるとしている。OECD(2018)は、非認知能力(社会情動的スキル)を強化する様々な取組について、特別に設計された正課活動や既存の正課活動を応用すること、学校・学級風土の改善に取り組むことや課外活動が重要な手段であることを示し、課外活動は、責任感、忍耐力、チームワーク、自信などを高めることができ、日本では、教育課程に「特別活動」を定めていることを取り上げている。白松(2017)は、「特別活動」は、自治的活動を通して「他者と協働する力」を、自己指導能力の育成を通して、「自己を制御する力」を育成する教育活動であり、どの活動においても、「目標を決め、やり抜く力」を育てており、非認知的能力・社会情動的スキルを育成するために重要であることを示している。

以上のことを踏まえ筆者は、非認知能力の向上に効果的かつ小学校教育において実践可能な取り組みを検討しまとめ表3に示す。さらにその取り組みを実践し、その効果を考察していく。

表3 小学校教育における非認知能力の向上に向けた教育に有効であると考えられる取組

<ul style="list-style-type: none"> ・特別活動(学校行事、学級活動(1)「学級や学校における生活づくりへの参画」、(2)「日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」、(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」)の授業実践に取り組む。(平成29年告示小学校学習指導要領解説特別活動編) ・各教科等の授業実践において、児童が学習内容の理解だけでなく、培われる非認知能力や汎用的な能力について捉えることができるようにし、学ぶことの意義を理解できるようにする。 ・他者と協力して取り組むような活動や自力で問題解決に粘り強く取り組むことができるような学習過程にする。 ・キャリア教育(基礎的・汎用的能力の育成、キャリア・パスポートの活用)の授業実践に取り組む。 ・共感的な態度で接する、期待や自信を与えるようなフィードバックをする、成長思考ややり抜く力を伸ばす褒め方をする、児童の努力を価値づけるような工夫をするなどの教師の支援に取り組む。

表4 学力(国語)と非認知能力の相関

	協働性	好奇心	自己主張	粘り強さ	総合得点
相関係数	.211*	.336**	.253**	.162	.253**

** . 相関係数は 1% 水準で有意。* . 相関係数は 5% 水準で有意。

5. 実態調査の結果と考察

小学校第6学年を対象とした非認知能力に関する質問紙調査結果を、最尤法・プロマックス回転による因子分析を

我那覇：小学校教育における非認知能力の実態把握及びその教育の可能性に関する研究

行った結果、4因子が妥当であると考えられた。その4因子についてCronbachの α 信頼性係数を算出し、内的整合性を検討した結果、おおむね0.80程度の値が得られた。これらより、「協働性」「好奇心」「自己主張」「粘り強さ」の4因子が抽出された。調査Ⅰの結果、非認知能力と国語の点数には、弱い正の相関がみられた。各因子では、協働性、好奇心、自己主張に弱い正の相関関係があり、粘り強さにはみられなかった(表4)。一方、算数との相関はみられなかった。

表5 沖縄県と他県の非認知能力の総合得点平均値の差

調査Ⅱでは、沖縄県と他県の非認知能力の総合得点平均値を比較した。沖縄県(n=546)80.1点、他県(n=493)平均83.5点であり、沖縄県は他県に比べ有意に低かった($p < .01$)。また、沖縄県はA県とB県に比べ有意に低く($p < .05$)、C県とD県との差はみられなかった(表5)。次に、沖縄県の学校間(n=8)で非認知能力の平均得点を比較したところ有意な差がみられた($p < .01$)。また、沖縄県の2学級以上編成の学年である7校中4校では、学級間の差のみみられ、その4校全てに10点以上の差がある学級間が存在した($p < .05$)。

各県, n=人数	総合得点平均値 (104点中)	平均値の差
沖縄県(n=546)	80.1	
A県(n=210)	84.2	-4.19*
B県(n=106)	86.9	-6.80*
C県(n=97)	79.6	0.48
D県(n=80)	81.6	-1.58

*. 相関係数は5%水準で有意。

以上の結果から、沖縄県児童の非認知能力と国語の点数に正の相関が示されたことより、非認知能力と認知能力は互いに影響しあうことが示唆された。認知能力と非認知能力は相互に作用し合い、子供に様々な成果をもたらすと報告されている(OECD 2018)。本研究でも同様な傾向がみられた。また、協働性、好奇心、自己主張の因子と国語の点数に相関関係があり、粘り強さとは有意な関連がみられなかった。一方、ベネッセ総合研究所(2019)は、小学校低学年で粘り強さに関する力が身に付いていると、小学校4年生での思考力が高くなることを報告している。この異なる結果は、本研究が横断調査であることや非認知能力の測定が小学校低学年ではないこと、調査対象及び調査方法の違いによるものと考えられる。しかし、これらのことから、どの因子においても、認知能力と関連する重要な要素であるということが考えられる。

一方、沖縄県は他県の児童に比べ非認知能力の得点が低いことが明らかになった。先行研究では、幼児期の「非認知能力」が土台となり、小学校低学年の「学習態度」が身につく、小学校高学年の「言葉のスキル・思考力」に繋がっていることを縦断調査にて明らかにしている(ベネッセ教育総合研究所 2019)。このことから、土台となる非認知能力の課題が学習態度や認知能力の課題に影響する可能性が考えられる。沖縄県は全国学力・学習状況調査の結果、全国最下位という課題を受け、長年、学力向上対策を実施し、授業改善等に取り組んでいるが(沖縄県教育委員会 2020)、今後は学力の土台となる非認知能力に着目し、その実態把握と向上について対策を講じる必要があると考えられる。さらに、非認知能力が、地域差や学校間差だけでなく、学級間差があることも明らかになった。同じ地域や学校で過ごす同学年の児童に差が生じるということは、学級担任の指導や支援の違いから、非認知能力に差が生じる可能性が考えられる。本研究では、その内実まで明らかにすることはできていないため、今後の課題とする。

6. 実践の結果と考察

筆者は、第6学年A組の学級担任をしている。本研究では、非認知能力の向上に資するよう、授業等における指導・支援の工夫改善を実践し、非認知能力の教育の可能性を考察した。以下に学級活動と算数の授業実践の結果と考察をまとめる。

(1) 特別活動の授業実践(実習校:沖縄県公立B小学校)

特別活動の授業実践について、以下の実践に取り組んだ。

学級活動「6年生になって～最高学年が始まりました～」 2021年4月23日金曜日 5年生から持ち上がった「キャリア・パスポート」を振り返り、目指す6年生像を考え、そのために必要な力はどんな力かを考え、具体的な行動目標を決定し、今学期取り組んでいく内容を決める。
学級活動「1学期前半をふり返って～6年生4分の1の成長～」 2021年7月20日火曜日 「成長日記」を通して、子どもが最も頑張ったこと、成長したことをふり返り、どうして成長できたのかプロセスを考え、自身の成長を認めることにつなげ、今後(夏休み明け)の目標の設定に生かしていく。
学級活動「どうして勉強するのか～将来の自分と今はつながっている～」 2021年9月29日水曜日

課題研究最終報告

現在の学習が将来の自分の能力や態度と繋がっていることを考え、学ぶことの意義を見出し、なりたい自分を目指すための目標を立て、現在の学習に意欲をもって取り組むことができるようにする。

学級活動「1学期をふり返って」 2021年10月13日水曜日
1学期をふり返って、(1)学習面、(2)生活面や学校行事、(3)家庭や地域、(4)学級や学校の一員としての視点で頑張ってきたこと、成長したことを話し合う。その中で自分が最も成長したことを考えまとめる。

学級活動「6年生後半にむけて～未来予想図をかなえよう～」 2021年10月27日水曜日
6年生後半にむけて、なりたい自分について考えるために、今後の各場面における自分への問いかけや励ましを考えることで、これからの生活をよりよくしていくと取り組むことができるようにする。

学級活動「運動会をふり返って～負けたリレーから学ぶこと～」 2021年11月9日火曜日
運動会を振り返り、練習ではずっと1位だったのが本番では最下位になったリレーについてどのような気持ちになったか、どう考えたか、どのようなことを学ぶことができるか話し合い、学びを見出すことができるようにする。

ここでは、学級活動「1学期前半をふり返って - 6年生4分の1の成長 -」の実践について考察する。

- (1) 学級活動③題材「1学期前半をふりかえって ～6年生4分の1の成長～」 2021年7月20日火曜日
一人一人のキャリア形成と自己実現 ア現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成
- (2) 目指す児童の姿(表1(4)より)
①粘り強く取り組む。③目標の達成に向けて自分を律する。⑥前向きに考え行動しようとする。⑦自分を認め励ます。
- (3) 活動内容
本授業は、「成長日記」を通して、子どもが最も頑張ったこと、成長したことをふり返り、どうして成長できたのかプロセスを記し、自身の成長を認めることにつなげた。また、教師や友達と交流し価値づけることで、自信を持つことができるようにした。この成長日記を確認し、今後(夏休み明け)の目標の設定に生かしていく活動を行った。
- (4) 授業の実際
①つかむ【「めあて」の確認】成長日記をもとに、6年生の1/4(1学期前半)で身についた力として表現する。
②さぐる【課題の追求】今後の学校生活における成長の機会を考える(学校行事や日常生活等)。
③見つける【1学期の目標を考える】1学期後半もう少しレベルアップの自分を目指してどのような姿がよいかグループで話し合い、ホワイトボードにまとめる。
④決める【目標設定と振り返り】自身が目指す姿とその理由を考える。この目標に対し、児童同士で応援メッセージを書く。

表6は授業で使用したワークシートの記述である。児童Cの記述からは、「(今までは)授業で分からない事があるとすぐにあきらめていたが、分かるまであきらめないでちゃんと理解しようとしている」と自身の変容を実感していることがわかる。また、「最後まであきらめない」力を、「授業だけでなく他の事でも」と汎用的に生かそうとしている様子がわかる。そして、今後の目標を「失敗しても」を付けたし、あきらめない力をさらに高めようとしている。このことから、児童Cの「目標の達成」に関わる児童の姿②「困難があってもあきらめない」姿を見取るとできると考える。次に、児童Dの記述からは、算数の自力解決の場面で、早く解いて1番になりたい欲求を抑え、正確さを重視し丁寧に考えようと思変容したことを自覚していることがわかる。それを「自分の気持ちをおさえて正確にやる力」と表し、いわゆる自制心を認識している様子がわかる。これは目指す児童の姿③「目標の達成に向けて自分を律する」姿だと考える。他の児童も「協力すること」「挑戦する力」などの非認知能力に関する記述があった。その中でも、算数や体育の学習を通して身についた力に関する記述が多かった。算数や体育の課題解決に取り組むという学習内容や学習過程で、試行錯誤しながら諦めずに取り組んだり、友達と協力し取り組んだりすることに繋がり、「目標の達成」や「他者と協働」に関する非認知能力の向上に有効だと考えられる。また、本実践を通して、自身の成長を自覚したり、友達や教師に認められ励まされたりすることが、児童の姿⑧「自分を認め励ます」ことや児童の姿⑦「前向きに考え行動しようとする」ことに繋がり、「感情の調整」に関する非認知能力の向上に資すると考えられる。一方、「計算が速くなった」「跳び箱を跳べた」などの知識や技能が身についたと記述した児童が約16.7%いた。このような児童は、自身の非認知能力に気付いていないと言える。それを、どのように習得したのか、どうして頑張れたのか考えることで、その知識や技能の習得と非認知能力の関わりに気付くことができると考える。

表6 ワークシートの記述の様子(原文ママ、下線は筆者による)

	「成長日記～6年生1/4の成長～」	「1学期前半をふりかえって～6年生4分の1の成長～」
児童C	私は授業でわからないことがあると、すぐにあきらめていました。だけど最近、友達に聞いたり先生におしえてもらったり教科書をみたりして分かるまであきらめないでちゃんと理解しようとしています。今までの私と比べてみると成長したなと思いました。授業だけじゃなくて他の事でも最後まであきらめないでがんばりたいなと思いました。	①6年生4分の1で成長した自分 「最後まであきらめない」 ②一学期後半から目指すもう少しレベルアップの自分 「失敗しても最後まであきらめずに挑戦する」 何かでつまずいても前向きに考えてあきらめずに挑戦したることができると思うから。
児童D	一学期前半をふり返って、自分が一番成長したと思う事は、算数で「自分のペースで問題を解く事」ができるようになった事です。それは、ある授業で今まで「一番！一番！」「速く！速く！」だったけど、なぜか「間違わないように！」と自分のペースで進めることができたのです。その「なぜか」は曖昧だけど、きっと自分に合わなかったからだだと思います。今までずっと一番を目指して間違えてたので、自分をおさえて挑むのは難しいだろうけど、必ず、正確にマイペースで挑んで一番をとってみようと思いました！(やればできる)	①6年生4分の1で成長した自分 「自分の気持ちをおさえて正確にやる力(算数)」 ②一学期後半から目指すもう少しレベルアップの自分 「臨機応変に行動し、それに対して予想ができる自分」 (中学校へ行ったら、教科担任制で、指示される事が少なく、自分たちで行動しないといけないう、その事で足を引っ張るよりリードしていきたいから)

我那覇：小学校教育における非認知能力の実態把握及びその教育の可能性に関する研究

次に、学級活動「どうして勉強するのか～将来の自分と今はつながっている～」の実践を考察する。

(1) 学級活動③ 題材「どうして勉強するのか～将来の自分と今はつながっている～」 2021年9月29日水曜日 ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用
(2) 目指す児童像(表1(4)より) ⑦前向きに考え行動しようとする ③目標の達成に向けて自分を律する。④他者の考えや気持ちに共感できる。
(3) 活動内容 現在の学習が将来の自分の能力や態度とつながっていることを考え、学ぶことの意義を見出し、なりたい自分を目指すための目標を立て、現在の学習に意欲をもって取り組むことができるようにした。
(4) 授業の実際 ①つかむ【課題の確認】ICT 端末でアンケート集計ソフト活用し、①どうして勉強するのか、②どんな気持ちで勉強しているか回答してもらい、集計結果をもとに話し合う。 ②さぐる【課題の追求】現在学んでいる学習が将来どのような力や態度に繋がっていくか考える。 ③見つける【学ぶことの意義の確認】各教科の学びが将来どのような力になるのか全体で確認する。 ④決める【目標設定と振り返り】何の学習を、どのように頑張る、どんな力につなげたいか将来への見通しを持ち現在の目標を決める。

本実践では、各教科における現在の学びが将来どのような力につながるのか考え話し合った。体育では「できなかったことを乗り越える力、粘り強く物事に取り組む力、前向きに取り組む力」などの意見が出た。道徳では「相手の気持ちを考える力、思いやり」、特別活動では、「みんなで力を合わせて協力する力、協調性、挑戦する力」などが挙げられた。このように、各教科等を学ぶ意義を確認した後、現在の学習と将来身に付けたい力について考え個人の目標を設定した。「できないことをできるようになるまで頑張り、あきらめない力につなげたい」「人の気持ちを考える力」

表7「どうして勉強するのか」ワークシートの記述

児童の目標と目指す児童の姿(表1(4))の関連
・体育を粘り強く、あきらめないでがんばって、将来、アドバイスなどし合う力につなげていきたいです。(児童の姿①)
・体育で、できないことをできるようになるまでがんばって、あきらめない力につなげたい。(児童の姿②)
・道徳、登場人物になりきる。社会に出てまず大切なのは、人の気持ちを考えることだからその力につなげたい。(児童の姿④)
・学活の学習を積極的に頑張り、 <u>分担し協力する力につなげたい。</u> (児童の姿⑤)

「分担し協力する力」につなげたいなどの目指す児童の姿と関連する記述(下線)があった(表7)。

表8は本時の振り返りの記述である。下線(直線)部分から、学ぶことの意義を理解したことで、「ポジティブに考えたり、工夫したりして、勉強を頑張っていきたい」と学習に前向きに取り組もうとしたり(児童の姿⑦)、「間接的でも大人になって使うということがわかったのでなるべく全ての授業を主体的に取り組みたい」と自分を律して頑張ろうとしたり(児童の姿③)と考えている様子を読み取れる。下線(波線)部分からは、「みんなの意見をシェアしてわかった」と話し合いを通して、友達の意見を聞いて考えが広がったり納得したりする様子(児童の姿④)がわかる。また、児童Iの記述から、児童自身が学ぶ意義を見出し実感することが、主体的に学習に取り組もうとする意欲を高めることに効果があると考えられる。

本時を通して、児童が現在の学習が将来どのような力につながるのか考えることで、各教科等が学習内容の理解や技能の習得だけでなく非認知能力を含む資質・能力を高めることを理解することができた。また、将来身に付けたい力にむけて目標を設定することで、今後の学習に目的意識を持って取り組むことができると考えられる。このことが、表2の③「児童自身が非認知能力の意義や重要性を理解し、その向上にむけ努力することができるような指導や支援を行う。」ことにつながり、非認知能力の向上に資することが期待できる。

表8 学活「どうして勉強するのか～将来の自分と今はつながっている～」ワークシートの振り返りの記述

E:今までは、面倒くさくてやりたくなかったけど、将来に役立つことが分かったので、 <u>もっとポジティブに考えたり、工夫したりして、勉強を頑張っていきたいです。</u> (児童の姿⑦)
F:今までは「大人になってどう使うんだろう…」とか「お母さんこれ覚えてなかったけどいらないじゃん」とか思ってたけど、この学習をして間接的でも大人になって使うということがわかったのでなるべく <u>全ての授業を主体的に取り組みたい</u> と思いました。(児童の姿③)
G:11の教科のことについて考えて、苦手な教科は悪いことばかり考えていたけど、シェアしたのを見てみると、 <u>たしかに将来役立つかな～と思ういいこともあって、あきらめないで頑張ろう!!</u> と思いました。(児童の姿②)
H:最初は「めんどくさいな」、「やりたくないな」という気持ちで勉強をしていたけど、何のためにしているか考えることで、 <u>前向きに頑張ろうという気持ち</u> になりました。(児童の姿⑦)
I:自分が必要なものを勉強していることが分かったし、 <u>自分が「これ必要だな！」</u> と思ったら少しは勉強する気になる。
J: <u>将来役立つものは色々あるとみんなの意見をシェアしてわかった。</u> もっといろんなものが大事か考えたい。(児童の姿④)
K: 今回の授業で <u>みんなの意見をきいて「たしかに」や「こう利用したら」したらと考えることができました。</u> その中でも僕は社会体育で将来の自分に繋げるために <u>社会体育を中心に勉強頑張っていきたいです。</u> (児童の姿④)

(2) 算数科における実践を通して

算数科の学習を通して、非認知能力の向上にむけどのように取り組むことができるか検討し、表9の指導・支援を実践し、その効果を考察した。

表9 算数科における非認知能力の教育の可能性に向けた指導・支援

指導・支援	手立ての内容
学ぶことの意義の理解	<ul style="list-style-type: none"> 算数の学習を通して、計算や作図等の技能や算数用語等の知識の理解の習得という結果だけでなく、その過程を通して、「できるようになると前向きに取り組む」、「最後まであきらめない」、「粘り強く取り組む」、「友達と協力し思考を広げる」、「教え合うことで説明する力がつく」、「学んだ事を生かして考えることを楽しむ」などの学ぶことの意義（非認知能力）を確認する。 日々の「算数の力成長日記」の記述から、学ぶことの意義（非認知能力）に関する内容を見取る。
学習過程の改善	<ul style="list-style-type: none"> 課題の把握後、自力チャレンジ（自力解決）かペアチャレンジ（隣同士ペアで考える）、みんなでチャレンジ（集団解決：教師や友だちと考える）を選択し問題解決に取り組むことができるようにし、よりよい解決方法を自己決定し主体的に取り組めるようにする。 振り返りを単元ごとの「算数の力成長日記」に記入し、毎時の記録から学習過程を振り返って、単元を通しての振り返りを行うことで学びを総括することができるようにする。
教師の支援	<ul style="list-style-type: none"> 「算数の力成長日記」に記入し、毎時の記録に対し、児童の努力を認め励ますようなコメントを返す。 児童の振り返りの記述（非認知能力に関する内容や主体的に学習に取り組む態度など）を次の授業で全体に共有し、価値づけたり、導入に生かしたりする。

児童が1学期の算数の授業を振り返り、算数の授業を通して成長した力を「算数の力成長日記」に記述した。記述内容を分類すると図1のような結果となった。「あきらめない(児童の姿②)」「協力する(児童の姿⑤)」「考えることを楽しむ(児童の姿⑦)」を非認知能力、「学びを生かす」、「見直す」、

「応用する」等を汎用的な能力とし、合わせて96.0%となった(図2)。これらは、ペーパーテストでは測れない数値化することが難しい能力である。これは、教師が、算数の学習が内容の理解だけでな

く、その過程を通して身につく力(非認知能力)を確認したり、粘り強く取り組む姿や友だちと協力する姿を声掛けや日記のコメントで価値づけたりしたことで、児童自身がその重要性を理解し、振り返って成長を認めることができたと考える。また、表10の「自力チャレンジを選んで粘り強く取り組み達成感を感じた」「友達と解くと楽しかった」などの記述から、問題解決場面で、解決方法を自己決定し取り組んだことが、主体的に取り組む態度につながったと考えられる。その過程で最後までやり抜く達成感や友達と協力するよさを実感し、非認知能力の向上に効果があったのではないかと考察する。このように、教師が、児童の非認知能力を含む能力の向上を見取ったり、どのような過程で向上したのか理解したりすることによって、今後の授業改善に生かすことも期待できる。

7. 総合考察

本研究は、小学校教育における非認知能力の実態把握及び教育の可能性を明らかにしていくことを目的に、第6学年児童を対象とした質問紙による実態調査及び教育実践を行った。

実態調査の結果から、沖縄県の児童の非認知能力と国語の点数に正の相関が示され、非認知能力と認知能力は互いに影響しあうことが示唆された。今回の調査で示された非認知能力と認知能力の関連性は、先行研究の結果と概ね一致した。一方、沖縄県の児童は他県の児童に比べ非認知能力の得点が低いことが明らかとな

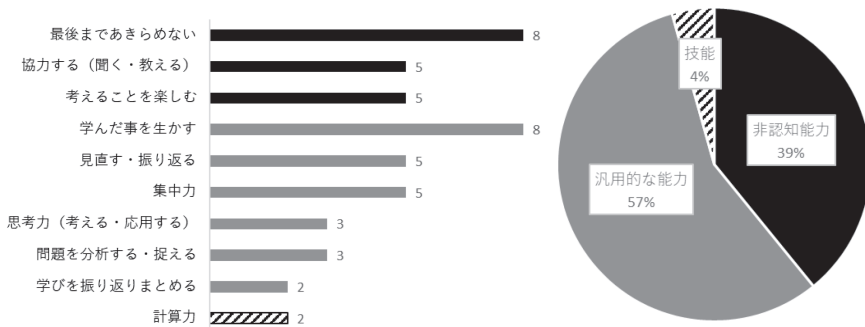


図1 算数の学習を通して身についた力(n=46) 図2 身についた力の特性による分類

表10 算数日記「学習を終えて」の記述：単元「円の面積」

L: 円の面積の単元を振り返って私が1番達成感を感じたことは9月17日の複合図形の面積を求める授業で、私は自力チャレンジを選び、解こうとしたら、1問目から頭がごちゃごちゃになり、15分苦戦したけどもう一度頭をリセットさせて解いてみたら簡単に解くことができました。このように粘り強くあきらめないで前に進むことで達成感が生まれるんだなと思いました。この出来事を忘れずにどの場面でも使っていきたいです。
M: 円の面積の求め方を考えて式を自分たちで立てる事がむずかしかったので、円の面積では考えることを楽しむ力がついたと思います。円の面積は÷2や÷4が出てきたりするので少し難しかったです。自力で問題を解いたりするのが難しかったけど、友達と協力して問題をとくと安心感もあって楽しかったです。これから円の面積を使っていけるようにしたいです。

我那覇：小学校教育における非認知能力の実態把握及びその教育の可能性に関する研究

った。沖縄県は、全国学力・学習状況調査で明らかなように、認知能力も他県に比べ低く、教育現場において長年の課題とされてきた。認知能力の課題は、土台となる非認知能力の課題が関連している可能性が考えられる。また、非認知能力が社会的・経済的成功や心身の健康に強く影響を与えていることからも、沖縄県の児童の非認知能力が他県児童に比べなぜ低いのかその要因や背景を明らかにする必要があると言える。また、地域差や学校間差だけでなく、学級間差があることも明らかになった。同じ地域や学校で過ごす同学年の児童に差が生じるということは、学級担任の指導や支援の違いが影響する可能性が考えられる。このような差が生じる要因を明らかにしていくことで、非認知能力に効果的な教育の在り方を探ることができる。しかし、本調査から学級間の差を生じさせる内実を明らかにすることはできないため、今後の課題としたい。

本調査の結果、沖縄県の児童の非認知能力に課題があることが明らかとなり、その向上を目指して教育実践を図る必要がある。しかし、非認知能力の効果的な教育実践の事例は少ない。そこで本研究では、非認知能力の向上に資する教育実践について考え、その効果について考察した。

授業実践の結果からは、特別活動や算数における学ぶことの意義を理解する活動や自身の学びや成長をふり返ってまとめる活動の導入により、児童が非認知能力の重要性に気付き、自身の経験から獲得した成長、つまり非認知能力を認識することに有効であった。もちろん、そこには非認知能力の向上に資するような教師の働きかけが重要であると言える。児童は、教育活動を通して意図的あるいは偶発的に様々な非認知能力の獲得や向上にむけ取り組んでいる。そのことを教師が積極的に見取り、どのような過程で向上できたのかを捉えフィードバックしたり、児童が自身の非認知能力に気付くことができるようにしたりすることが重要だと考える。また、このような実践を通して、教師が、非認知能力の向上にどのような指導・支援が有効であったのか理解することができ、指導の改善に生かすことができる。さらに、本研究を通して様々な方法で見取することで、観察や質問紙だけでは見取ることが難しい個人内の成長を見取ることができたと感じている。

今後は、非認知能力の正確な実態把握の方法を確立することやその信頼性や妥当性を検証していく必要があると考える。また、非認知能力の向上に資する教育の在り方について明らかにするため、教師の指導・支援の改善と児童の非認知能力の向上の因果関係を明確にしていくことが必要である。

今後は、このような課題を明らかにするために、自身の教育実践を積み重ね、沖縄県の子供達のよりよい人生につながっていくことを願い、非認知能力を育むことができるよう尽力していきたい。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所, 2019, 『幼児期から小学4年生の家庭教育調査・縦断調査 同一の子供について, 7年間(3歳~小学4年生)の変化をとらえる追跡調査結果・第5弾』.
- 中央教育審議会, 2016, 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』.
- Duckworth, A., 2016, *Grit: the power of passion and perseverance* New York, NY: Scribner. (神崎朗子訳, 2016, 『やり抜く力 GRIT(グリット) —人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』ダイヤモンド社.)
- 遠藤利彦, 2021, 「非認知能力とは何か - 自己と社会の視座から -」『指導と評価』日本図書文化協会日本教育評価研究会, 67(798) 24 - 26.
- Heckman, J. J., 2013, *Giving kids a fair chance*, Boston, Mass: MIT Press. (古草秀子訳, 2015, 『幼児教育の経済学』東洋経済新報社.)
- 経済協力開発機構(OECD), ベネッセ教育総合研究所企画制作, 無藤隆・秋田喜代美監訳, 2018, 『社会情動的スキル 学びに向かう力』明石書店.
- 国立教育政策研究所, 2019, 『平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査』.
- 無藤隆, 2018, 「はじめに」, ベネッセ教育総合研究所企画制作, 無藤隆・秋田喜代美監訳, 2018, 『社会情動的スキル 学びに向かう力』明石書店, 3-4.
- 沖縄県教育委員会, 2020a, 『沖縄県キャリア教育の基本方針』.
- 沖縄県教育委員会, 2020b, 「学力向上推進5か年プラン・プロジェクトII」.
- 小塩真司, 2021, 『非認知能力 概念・測定と教育の可能性』北大路書房.
- 白松賢, 2017, 『学級経営の教科書』, 東洋館出版社.